

抵抗するティファ



成人向
コミック

怪しい男が 私達のレジスタンス組織のアジトでもある
セブンスヘブンのまわりをうろついていた。

その男をつかまえて しめて話を聞き出すと
ドン・コルネオの名前が出た。

バレットはコルネオなんて小悪党だから
放っておけて言うんだけど……

これは絶対 何かある
悪い予感がする

なんだか気になって仕方がなかった私は
ドン・コルネオに直接会って 話を聞き出すことにした。

まずは直接会うにはどうすればいいのか
街の裏情報屋のもとへ訪れた。



コルネオか？
それならオレの紹介状さえあれば
すぐに会えるぜ

コルネオの館へ行ける定期便のトラックも手配してやるよ

ほ…ホント？

まあ紹介料は3000ギルだな

3000？

(た…高い…)

どうしよう…今のアバランチにはそんな大金は…)

へへへ…私えねえか？ 姉ちゃん…
それにしてもアタ…いい体してるな

…！

なんならアタタのそのオツパイを
ちよつと揉ませてもらえれば
タダで紹介状やってもいいぜ？

…！！

(どうしよう…)

(こんな男に胸を触られるのはイヤだけど…)

(ドン・コルネオが何をしようとしているのか
どうしても気になるし…)



む…胸を
揉まれるくらいなら…!

これくらいは
ガマンしないと…!

「わ…わかったわ…少しだけなら…」
「ははっ! そうこなくっちゃなあ!」
男は喜色満面になると、私の胸をわしづかみにした。

「ちよ、ちよつと、そんないきなり…!」

私がそう抗議しても、男は聞く耳をもつてくれない。
形を確かめるかのような微妙な力加減で指を埋めていく。
それに応えて、私の胸の形が変化するのが恥ずかしい。

男>「へへ…見た目通りの良いもみ心地だぜ…!」

勝手なことを言いながら、男は下品な笑みを浮かべる。

「デカイほうだつてよく言われるだろ?」

「……ッ」

(そ、そりやちよつとは大きいかもしれないけど……)

そんな風に言われたことなんて!

知らず知らずのうちに、

私は自分の胸から視線を逸らせてしまっていた。

男の指が胸に埋まっている光景を

直視することができなかった。



男は服を一気にずり上げて胸を露出させてきた。

「ちよつ……ちよつと！揉むだけだつて……！」

「んん？ 服の上からだつて言った覚えはないけどな？」

男は挑発的な目で私を見る。

私が一瞬言葉に詰まったのを見て、

すぐに指の動きを再開させた。

自分の肌が、男の肌と生で接している感触……。

体温の温かさで背筋に怖気が走り、鳥肌が立つ。

「うう……っ」

そんな私の反応を楽しむかのように男は笑っている。

「んん？ 先つぽが立つてきたんじゃないか？」

言いながら、胸の先端を指でピンと弾いた。

「あっ！」

「ククク、まさか感じてるわけじゃないよなあ？」

「あ、当たり前よ……！」

男は執拗に先端を指で弾く。

そのうちにむずがゆくもどかしい感覚が芽生えてきた。

(まずい……何だか、変な気分……)

私は歯を食いしばって

必死にその感覚を押さえつけようとした。

でも、男が指で強く先つぽをつまんできて、

「ああっ……！」

思わず声を上げてしまう。

それに気を良くしたのだろう、
男は更に指に力をこめて私の胸をむちやくちやにもみしだき始めた。
ティファ「んっ……は、あ……んんッ！」
(ダメ、やっぱり私、胸は……!)

も…
もういいでしょ!

そう言うなって

アンタも
感じてきたんじゃ
ないのか?

か…感じてなんか!

はあ!!

へへへ…
そうかい

もみ

もみ



もう少しだけガマンする→6

ガマンできない→12

へへ……
こんなイイ身体を前にして
ただ触るだけで
済むわけがないだろ？

やだっ！
そこは……！

ここまでするなんて
聞いてなっ……

はあ！！

（もう少しだけ……もう少しだけガマンしないと……）
耐えるためにぎゅっと目を閉じる。
でも、そこで目を閉じたのが間違이었다。
私はあつという間に固いベルトのようなもので
椅子に縛り付けられてしまった。

「え……？　ちよ、ちよっと、こんなの——」

戸惑う私をよそに、男は再び私の身体に手を伸ばす。

「ん……っ！」

そしてあろうことか、

今度は股間にまで指を這わせてきた。

「ここまでするなんて聞いてなっ……ああッ！」

だけど今更抵抗しようとしても遅かった。

縄がしっかりと手と胴体に食い込んでいて

全く身動きがとれない！

「へへ……こんなイイ身体を前にして、

ただ触るだけで済むわけがないだろ？」

男の野太い指が胸を股間を這い回り、

じわじわとした刺激がもたらされる。

「くう……ッ」



「やだ、やめてったら！」
なんとか暴れて抜け出そうとするけれど、
縄はきつく結ばれていて解けそうにない。

「ん……や、ああ……んんっ！」

男は胸をもみしだきながら、
ついに私の下着のなかにまで手を差し込んできた。

ぬふ、にゆぐ……。

不快な感覚がはつきりと立ち上る。

けれどそれ以上に、

男の指がスムーズに動いたことが驚きだった。

ちよつと！
こんな！約束が……！

アంతタのカラダを
いじっていると
興奮してきちまってなあ

そ……そんな……

くツ……
これ以上やったら
怒るわよ！

うあッ!!

へへへ……
そんな声で
すこまれても
怖くねえなあ

あ
あ

はあ
はあ

はあ!!

耳元の男の吐息が荒くなり、指の動きも激しくなるにゆぶ、ぐにゆ、ちゆぶ——！
「ん、ああ……や、ああ……！」
男の指は私のおその形をなぞるようにしながら確実に敏感なところをこすりあげてくる。

「お……？」

勃ってるのは乳首だけじゃなくてここもか？」

獣欲のこもった熱っぽい声が私の耳朶を打った。

くちゆくちゆという淫らな音も

はつきりと響いていて、

私の理性を少しずつ崩していく。

（こ、こんなに濡れてるだなんて……！）

胸の刺激も股間の刺激も単調なものだけ……。

でも単調なぶん、

私の期待通りの動きをして感覚を昂ぶらせる。

（あ……胸のさきっぱ……

ダメ、そこアソコを、一緒にされると……っ！）

「ふあああん！」

胸の屹立と、秘所の屹立。

そこを同時にこすられて

私は思わずはしたない声をあげてしまう。

（うう……流されちゃ、ダメなのに……！）

認めたくないけれど、私は確実に感じ始めていた。

ここまできたらもうどんなに強い女だろうが関係ない

あとはゆっくり抵抗がおさまっていくのを待つだけ

イキのいい獲物が徐々に無抵抗になっっていくのはいつ見てもたまねえな

んんッ!!

ッ!!

ガッ

ガッ

ガッ

最後に残った理性を振り絞って私は必死に股を閉じる。だらしなく開きかけていたそこがぴったりと合わさり、男の指の動きが制限された。

「……フン、案外強情なんだな……」

つぶやきながら男は一旦私から手を離す。

でもそれで終わったわけじゃなかった。

「んぐ……!」

いきなり、私の口に甘い香りのする布が押し付けられる。

「うぐ、ふはっ……んんっ!」

暴れて逃れようとしても無駄だった。

布がぴったりと鼻と口を塞ぎ、

どんだん甘い香りを伝えてくる。

息を吸うたびに甘い香りが痺れとなり、

四肢の感覚を鈍らせていく。

(これは……筋弛緩剤!?)

「うむ……、あう……、ああ……んぐっ!」

こわばっていた身体からどんだん力が抜けていき、

だらしなく椅子にもたれかかる形になってしまう。

「強情なお姫様にはやっぱりこれが一番だな」

「ふはっ! あふ、はあ、はあ……!」

男はそんな私を満足気に見下ろして、股を大きく開かせる。

そしてその姿勢のまま脚を拘束してしまった。

(こ、こんな格好……!)

男の前で娼婦のように脚を開いている私。

舐めるような視線が全身に突き刺さる。

「うう……くう……っ!」



「コルネオなんかのところにいつでもオモチャにされて捨てられるだけだ」
動けない私の手足をもてあそび、
舌を這わせながら男は言う。

「あんたみたいなイイ女……」

コルネオなんかにはもったいないねえ」

男の目はエサを前にした獣のようにギラギラと光っていた。
動かない身体、そして欲望を突きつけてくるオス。

私は自分の運命を覚悟し始めていたのかもしれない。

気力は萎え、男にされるがまま

手も脚もどんどん拘束されていく。

気がつけば、男に向かって尻を突き出すような

格好にさせられてしまっていた。

「オレの女にしてやるぜ」

そうつぶやいて、男は私の秘所に自分のモノをあてがった。

酷い言葉と行為。

なのに、私の胸には何故か甘い痺れが広がってしまう。

「いくぞ……」

くちゅくちゅとペニスに

愛液をこすりつける卑猥な音がして――

あんたみたいないい女……
コルネオなんか
やるにはもつたいねえ

オレの女に
してやるぜ

あ……

ククク……
想像した通り
最高だぜ……!!

うあッ

はあッ

「んんうっ！」

——そのまま一気に胎内に突き入れられる。

「ふ、深い……」

私のそこは柔軟に蠢き、男の剛直を難なく受け入れていった。
「く……想像した通り、最高だぜ……!!」

「は……あ、ああ……」

「動くぞ！」

「うう、ふあッ、ああ……ひんっ！ や、あああッ！」

——パン、パン、パン、パン！

私のお尻に男の腰が当たり小気味いい音が鳴る。

「はあ、はあ、あ……ん、ふあ、ああんっ！」

身体が弛緩しているぶん、

男の熱くて固いものの感触をよりリアルに伝わってくる。

入り口から奥まで一気に割り開かれて……

先端が最奥を、トントンって……。

その度に頭の芯が白い光に満たされ、

胸が狂おしいほどに切なく締め付けられる。

(もう……ダメ！おかしく、なってる！)

「どうだ？ イイんだろ？」

「う……あ、はあ、んくっ……!!」

「応えろよ！」

「ふああああん！」

男は今までよりも更に強く、勢い良く腰をうちつけた。

そしてそのままぐりぐりと

先端を一番奥の奥にこすりつけてくる。

「ああ……うう、うあ……あ、あああああッ！」

「やっぱり奥がイイんだな……」

へへ、まだまだこんなもんで終わりじゃないぜ！」

その声をどこか遠くに聞きながら、

私は最初の絶頂に達しようとしていた——。

END

「ちよつと！ もういいでしょ！

胸を触るだけだつて！」

私は本気で抵抗し、そして構えた。

少し息が荒くなつてしまつているのを押し隠して男を睨む。

「ああ…分かつた…分かつた…。

ネエちゃん、タダモンじゃねえな…

これ以上はやめとくか…

約束どおり紹介状はやるからよ」

男は一步後ずさりながら肩をすくめる。

情報屋がいうには、コルネオは

毎日女をとつかえひつかえしていて、

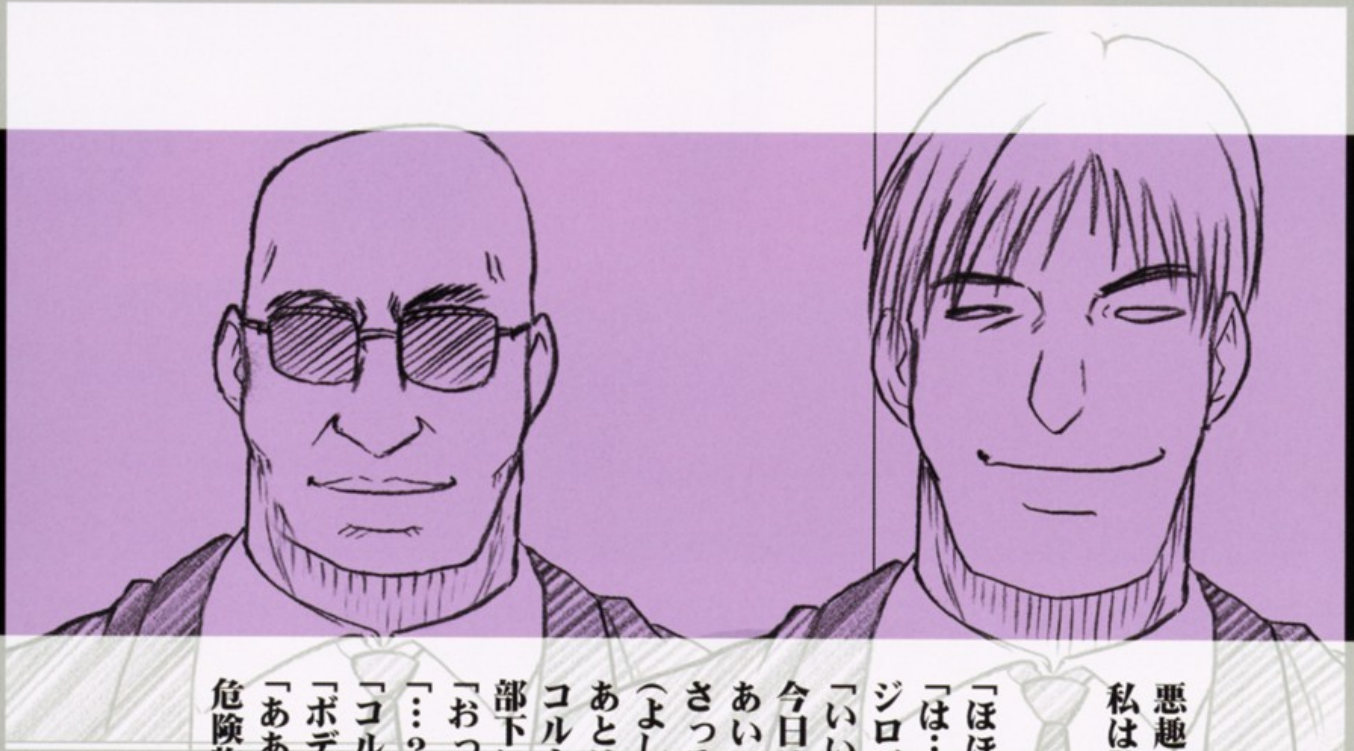
その日の気分で適当に

みつくろつた女を私室に呼ぶらしい。

私室で二人きりになつたところを

締め上げれば情報を聞きだせるはず、

ということだつた。



悪趣味なネオンサインがまばゆいコルネオの館。私は警備らしき男達に紹介状を手渡した。

「ほほう、なるほど…コルネオ様に会いたいわけか」

「は…はい」

ジロジロ見てくる。

「いいだろう、コルネオ様に会わせてやる。

今日はたまたまコルネオ様のスケジュールも

あいているようだし、

さつそく今晚の相手をしてもらおうか」

(よし…うまくいったわ…。

あとはコルネオと二人きりになつたところで

コルネオを締め上げて…

部下に何を探らせていたのか吐かせれば…)

「おつと その前に…」

「…？」

「コルネオさまに会う前にボディチェックが必要だな」

「ボディ…チェック？」

「ああ そうだ。

危険物を持ち込んでたりすると困るんでな」

危険物なんて…
な…何も!

決まりは
決まりだからな

カラダのすみずみまで
チエックさせて
もらうぜ

もうちよっとで
コルネオに
たどり着くんだから…
ここはガマンしないと!

モク

モク

モク
モク
モク

一人が素早く私の背に回りこみ、がっちり羽交い絞めにする。
「え……ちよ、ちよっと!」
もう一人は正面に立ち、胸に手を伸ばしてきた。

「何するのよ!」

睨んで抗議したけれど、男は慣れた様子で私の視線を受け流した
「俺達も好きでやってるわけじゃないんだぜ？」
コルネオ様の身に危険が及ばないようにやってるんだからな」

そんなことをうそぶきながら、
ねっとりとした手つきで私の胸をもみしだく。
「ほう、これはなかなか……」

本当にボディチェックをするだけなら
表面を撫でるだけでわかるはず。
男は明らかに楽しんでいた。

(これがこいつらの“役得” ってわけね……)
不快だけど、下手に抵抗したり暴れたりすると

コルネオに会うというチャンスがなくなってしまう。
だから耐えるしかない。

「……ん……う……」

「ん？ このひっかかりは何かな？」

男がわざとらしくつぶやきながら、乳首をつまんだ。

「んんっ!」

人差し指と親指でこりこりとひねるようにして愛撫してくる。

「あ……ん、はあ、あ……」

強弱と緩急をつけて巧みにさすられてしまい、
声を出さずにはいられなくなってくる。

「この硬く尖ったものは何だア？」

男の言葉通り、私の乳首ははつきりと自己主張し始めていた。
布地を押し上げて形が浮き出ている。

(でも……こんな風にされたら誰だって……)

さ...触られる
だけなら...!
でもそれ以上のじよ
は絶対!

もうちよしとだけ!
もうちよしとだけ
ガマンを...!

「この様子じゃ、まだ“チェック”しないと
いけないところがあるな」

嘲笑を浮かべながら、

私を羽交い絞めにしていた男が脇にまわった。

「な、何を……」

私の腕をしっかりと掴んでおさえつつ、

あいた手を太股に這わせる。

「う……」

スカートをずり上げるようにしながら殊更にゆっくりと、

徐々に股間にまで這い上がってくる手。

「そ、そんなところまで……!」

「案外こういうところに凶器が

隠されていることもあるんでね……」

「でも……っ!そこはっ…あんっ!」

抗議もむなしく、男の指が下着に触れる。

そしてその形を確かめるかのように

指の腹で擦りあげてきた。

「んっ……う……ッ!」

男の指がそこを往復するたびに、

ぞくりと寒気が背筋を走っていく。



も…もういいでしょ！
私…ホントに何も…！！

まだまだ
まだチエックは
終わってないぜ？

そこはっ…
もう！

ここがどうか
したのかな？

ヤッ！

「く……う……はああっ！」

私の意識が股間に集中に集中しているのを察し、別の男がいきなり乳首をひねり上げた。

(そんなにいきなり……い、痛いっ！)

「や、やめて……！ そんな、強くしたらあ！」

「強くしたら、どうなんだ？」

「い、痛い、痛……？ え……、あっ！」

男が乳首をつまむ力は多分変わっていない。

だけど、もう一人の男が

あそこを何度かなぞるうちにその痛みが消えて、

ジンジンとした熱い痺れに変わっていく。

まずい……！

このままされたら、私——！

もう少しガマンする↓
16

ガマンできない↓
22



「よし。危険物は持ち込んでいないようだな。
ボディチェックは終わりだ。」
ほっとする。

しかしその油断した瞬間、アナルから何かを注入される。

「……………!!!」

カラダが一気にあつくなる。

「な…何を！」

「ククク…ヘルスチェックだよ。

病気とか持ってたらマズイだろ？

だから健康体かどうか検査しないとな」

「そ…そんなっ！」

注入された薬液の量自体はわずかなものだと思う。

だけど、下腹の奥底で熱い液体が

大きく波打っているのを感じた。

じりじりと熱がこみ上げてきて、

頭の中までもを侵しはじめる。

どうだ？
カラダの調子は？

ダメッ！

んん？
何がどう
ダメなんだ？

「あ——あ、ああうッ！」
「おっと……」
身体が崩れ落ちそうになったところ男に支えられた。

「いや……は、はなし……て！」
「こんな状態で何言ってるんだかな」
言いながら、男は私の乳首を口に含んだ。
ぬらりとした舌の感触が伝わってくる。
「あ……はうっ！」

男は乳首を舌で転がしつつ吸い付くように愛撫した。
それに伴って下腹にこもっていた液状の熱が
かっと燃え上がって、独特の高揚感が生まれる。
「や、やだあ……」
後ろから私を抱き抱えているもう一人の男が
肩に舌を這わせる弱い刺激。
それすらも今の私にとっては
このうえない切なさをもたらすものだった。
二人の男に食いつかれ、
いいように身体をもてあそばれている……。

しまった……！
もっと早くに
本気で抵抗してあげば
よかったのに……！

あゝあゝ

いい反応
してるじゃねえか
なかなか

感度良好だな



も…もう！
これ以上は
許さな…

ああ！！

はあ！！

今からだつたら
本気で抵抗しても
いいんだぜ

ま
ムリだと
思うけどな

「フフ、だいぶデキ上がったってきたみたいだな」
「う……あ、はあ、やあ……」

「尻がそんなに気に入ったのか？」
「いやっ！ ちがう……お尻でなんて、私……」

「あんな変な感覚は、きつと薬のせいなんだから……」
「ここはそうは言っていないみたいだけどな」

「ほら、指をあてがっただけでこんなにヒクついてやがる」
「そんなわけ、ない……」

「それじゃあ前の穴と後ろの穴、
どっちをいじらりたいか言ってみろよ？」

「……！」

（自分で言わなきゃいけないなんて最低……！）
（でも……またお尻に入れられるよりは……）

「ぐくりと生唾を飲み込み、私は口を開いた」
「あ……」

「ニタニタとした笑みを貼り付けている男」
「やっぱりこんな奴らの

「言いなりになるなんて耐えられない……っ」
「どうした？ 何も言わないならやっぱりこっちか？」
「や、やだ、またお尻に指が……！」

「待って！」

「ま……え、に」
「ん？ 聞こえないな」

「前に……前の穴を……」
「ここか」

「んんっ！」
「男の指がいきなり膣口をかき回す」

「ぐちゅ、ぐちゅ、じゅぷ——！」
「激しく浅く出入りしながら、

「二本の指で入り口を押し広げているのがわかった」
「はあ……あ、あ、ああ！ ひう……！」

「やっとな素直になつてくれたな」
「はは、これで和姦成立つてとこだな！」

「コルネオさまの前に
オレたちが
味見させてもらおうか」

「久々の上玉だし
じっくり味わわせて
もらうぜ……!!」

「あッ!!」

「うぁッ!!」

「コルネオさまの前にオレたちが味見させてもらおうか」
男はズボンを降ろし、
隆起したモノを私に見せ付けるようにする。
（お、大きい……。あんなのを入れられたら……!!）
目を見開いている私を見て男は口元を歪ませる。
「久々の上玉だ。じっくり味わわせてもらうぜ……!!」
力強い腕が私の膝を掴み、股を割り開いていく。
「うぁ……。あ、ああ、あああああああああ！」
熱く灼けた鉄の杭を打ち込まれたかのような感覚。
ぐぬ……。ぬぶ……。
時間をかけて馴染ませ、
やがて男のものが完全に私の中に入った。
「ふう……」
「あ……。うっ、く……。ひ、あ……」
（大きすぎる……!）
あまりの圧迫感に息をするのがやっと。
快感よりも何よりも、まず圧倒的な存在感があった。
（入って、る……）
「ひだのひとつひとつが吸い付いてくるみてえだな」
「あ、や……。まだ、動かな……。いで……。っ！」
「へっ、こんな気持ちイイ穴で
いつまでもじつとしてられる男なんていないさ！」
ずぶ、ぐちゅ、ちゅぶ、じゅぶ——!!
「はっ、やあ、ああっ！ん、はああ！あ、んあっ……!!」
男が激しく腰を動かし始め、私の身体も大きく揺れる。
（身体が揺れてるんじゃないか……）
もう全部が、何もかもが揺れ動いてるみたい……!!
強い圧迫感が苦しい。
「うぁッ!!」
「うう、くふう……。やだあ、こんなの……。やあああああ！」

「おー
やってるやってる」

「なんだこいつ
後ろでも
できんのか？」

「ああ
どうも初物らしい」

「マジか？
じゃあそれは
オレがいたたくぜ」

「こいつ
締め付けが
キツくなりやがった……
お前らに見られて
興奮してるみたいだぜ！」

「ちが……ちがうう！
ひう！
ああ、はあ……！」

「フン、そこが嫌ならここはどうか？」

「へ……？ ひゃあああん！」

「圧迫感に更なる圧迫感加わる。もう一人の男の指が私のアナルの入り口をこねまわしていた前の男の動きに合わせてぐにぐにと指を挿入してくる。」

「いや……っ！ そっちはもつと、いやあ！」

「そんなイヤイヤって言われてもな。」

「こっちも使わねえと、時間がいくらあっても足りないぜ？」

「へ……？」

「見ると、男の人数が増えていた。」

「一人、また一人と部屋に入ってくる。」

「おー、やってるやってる。」

「なんだこいつ、後ろでもできんのか？」

「ああ、どうも初物らしい」

「マジか？ じゃあそれはオレがいたたくぜ」

「オレは口をもらおうとするかな……」

「それにしてもイイ乳してやがる」

「私のあられもない姿を見ながら」

「口々に勝手なことを言っている。」

「そ……そんな……」

「おら、こっちに集中しろよ！」

「ひんっ！」

「強く突かれると同時に下腹がどくんと波打ち、」

「中のペニスが一段と大きくなったように感じた。」

「こいつ、締め付けがキツくなりやがった……」

「お前らに見られて興奮してるみたいだぜ！」

「ふあ、ああ、ちが……ちがうう！ ああ、はあ……！」

「良かったな。これでお望みどおり、」

「一晩中前も後ろもマワしてもらえんだからな」

「くう……、や、ああ、いやあああああッ！」

END



「こ…こんなのチェックじゃないわ！」

私は男の手を激しく払いのけ、距離をとって睨みつけた。
「チツ……仕方ないな、

もう少し楽しめるかと思ったんだがな」

「ああ……ここでこんな上玉に

逃げられたらあとでコルネオさまにどやされちまうぜ」

(最低ね……)

「分かったよ。チェックはOKだ。

コルネオさまに会わせてやるよ」

「ほひ〜！いいの〜、いいの〜！」

これこれ、そんなにはずかしがらんで……」

もつと近くへ、な？」

「わ…わかつてるわ……でもね、ドン・コルネオ。
その前にひとつだけきかせて……」

「なくに大丈夫。俺アまだ独身だ。安心したか？」

「そ、そんなこときいてるんじゃないやなくて……」

「ちよ、ちよつと待ってよ！イヤ！まだダメだつてば！！」

「ホレ！ ホレ！ほひ〜！」

もうガマンでき〜ん！いくぞ〜！！」

●もうちよつとだけガマンする↓

23

●コルネオをぶつとばす↓

33



(どうしよう……ここまできたら
強硬手段に出てもいいんだけど……。

でも、うまく交渉すれば

もっとすんなりと情報を引き出せるかも……)
コルネオの肥満体をなんとか押し留めながら、
交渉の糸口を探そう。

そう思ったとき――

――強烈な衝撃が私を襲った。

「なっ！」

「ほひひ……あんまり手荒なマネは

したくなかったんだがの……」

「どうもねえちゃん警戒心があるみたいだったんでの。」

念には念をいれさえてもらったわけだ」

「ほれもう一発」

「ああああああっ！」

再度訪れる衝撃。

(スタンガン……！)

コルネオの手には青白い閃光を放つ

スタンガンが握られていた。

(ま、まずい……力が、全然はいらな……い……)

「さて楽しませてもらうかの？」



(うかつだった……最後の詰めが……)

私の身体はもうすっかりコルネオの腕のなかにあった。

だけど抵抗しようにも全く力が入らなくて、

動くことなんてできない。されるがままだった。

自分が脱がされているのをただ見下ろしていることしかできず
せめて頭の中だけでだけはこの状況をどう抜け出そうかと考える。

(隙を見て抜け出すしか……!)

あのスタンガンを奪って、部下達に気付かれないように……!

「ほひ？ ねえちゃんどうした？ こきげんナナメだの」

「当たり前じゃない！ あんな手荒なことして……!」

「すまんの、すまんの」

後でたっぷり金をあげるから、機嫌直してくれんかの？」

「……」

「金が欲しくないのの？ おかしいの……」

わしに抱かれに来るねえちゃんは皆、

金が目当てなんだがの？」

背後にいるコルネオから一瞬殺気が立ち上る。

口調は相変わらず間抜けなものだけど、

私が金以外のものを目的にして近づいたことを

明確に悟っている口調だった。

今気付かれてしまうのはまずい、絶対に――。

ま…待つて！
おねがい待つて！

んんん
どちらにせよ
俺に抱かれに
来たんだらう？

やっ！
やめて！
はなして！

いいの、
抵抗するおなごを
無理矢理犯すのも
いいの、

ぷるぷる

ギョ

「お、お金、くれるの？」

必死に笑顔を作って明るくい口調で言う。

「ほひひ。あげるとも、何せねえちゃんは娼婦だからの？」

「え——」

「どうしたかいの、そんな驚いた顔して。」

「お金が欲しいからわしにカラダを売りにきた、
そういうことじゃろ？」

「え、ええ——」

「ほひ、それならいいとも。ねえちゃんほどの上玉で
若い売女はなかなかおらんからの」

（売女……？ 私……？）

「ええおっぱいじゃの」

「ほひ？ まだほとんど触ってないというに、
ここはしっかり濡れておるのう」

（え……！？）

そんな、まさか。

「そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。」

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。

そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。そんな、まさか。



コルネオの太くて丸っこい指が、私のアソコをぐにぐにと愛撫する。

時々下着の布を引っ張って強く刺激もしてきた。認めたくないけれど、そのおかげで布地の白さにはつきりと染みが浮かび上がってしまう。

「ほひひ！ 姉ちゃんのこころは柔らかいのお。でもこの感触は……」

「まだそれほど男を知らんのじゃないかの？」

「！？？ な、何を聞いて……」

「ほひ、その反応！ 恥ずかしがらんでもええんよ。ほひ。ほひひ。生娘が金のために淫売になる……」

「最高じゃの……！！！」

「コルネオの手が急に素早く動きだした。」

「ん、んんっ……そんな、強く……！！！」

「ええのお、ええのお。」

「この新雪を土足で踏み荒らすような感覚！」

「大して男を知らんに、自分を売る天性のピッチちゃん！」

「……ッ！」



ええのお
ええのお

この新雪を土足で
踏み荒らすような
感覚！

ほひひ！
姉ちゃんのこころは
柔らかいのお

でもこの感触は……
まだそれほど男を
知らんのかないのかの？

(勝手なことばかりべらべらと……！)
でも今の自分は何を言われても抗議できない。
少なくとも表面上は従っておいて、
情報を引き出しやすいようにしないと……。
「そおら、こんなにシミを作って……。」
「ほひひ、そ、そうよ……私は、い、インラン……」
「ほひひ。そうじゃろそうじゃろ……」
「金でカラダを売る売女なものな？」
「コルネオの声のトーンが下がった。」
「その低い声は、さっきまでとは違ってかわって
私の胸に冷たい水のように刺さる。」
「表面を流れていくだけではあるけれど……」
「水の通った跡が熱くなるような。不可思議な感覚。」
「その嫌な予感を意識しつつも、今は奴の言葉に従うほかない。」
「そう……です、金でカラダを売る、ば、売女です……」

ほひひ
姉ちゃんは
マゾなんだのお〜？

言葉で責めたら
面白いように反応して
そそのめるの



言った途端に、ジュンっと身体の奥が火照った。

(え……あ、れ?)

下腹の奥に熱さが生まれ、それが股間から漏れ出す。どくどくと心音が鳴るのに合わせて、愛液がとめどなく溢れだしている。

(そん……な、こんな、いっぱい、ど、どうして!?)

「ほひ……」

コルネオが私の股間に這わせていた指を持ち上げて、私の目の前でこすりあわせた。

ねっとりとした液体——私のなかからでたもの——にコルネオの指が濡れている。

「なん、で……こんな、信じられな——!」

「こうなったらもう、あとは天国にいくしかないの〜」



卑猥で、そして満足気な笑みを浮かべながら
コルネオは再び私の股間に指を這わせた。

「んんんっ!!」

それだけでも強い波がくる。

ぐちゅ、ちゅぶ、ちゅ、ぐちゅ——!

「や、やら、ああ、ひいん……!!」

「ほひひ、姉ちゃんはずなんなのお〜?」

言葉で責めたら面白いように反応して、そそのるのお」

(こ、言葉って、あ——)

確かにそうだった。

コルネオから言われるだけじゃなく、

自分で言ったときの快感といたら——。

(やだ……どうして私、わざわざ自分で……)

「んあんっ! はっ、ああ、ひう……!!」

はあ、あ、う、んあ……は……!!」

自分のしたことを意識した途端に頭が真っ白になる。

そしてそれがそのまま何もかも

なくしてしまうような悦楽につながつ——。

「こらこら、勝手にイッたらダメだよ〜?」

「え、は、あ……?」

視界がぼんやりと滲んでいる。

憎むべき敵であるコルネオの顔がどこか遠い。



「随分素直になったかの？ ほひ？ どうか、淫売さん？」
「んんっ!？」

コルネオの一言で一気に意識が戻ってきて、
同時に腰がびくんと跳ねた。

(ち、違う、違う……。私は淫売なんかじゃ……。！)

「ほれほれ、意地を張るのは身体に良くないよ？」

「ここはこんなになってるんだから」

ぐちゅ、ちゅぶ、ちゅ——!

「あ、や、は……。！ んんっ、や、やだあつ!

どうして、私、おかしくなっ……。てエツ!

自分でもわかる。

もう愛液がとめどなく溢れだしていることが——。

「やだ、なんでえ……。？」

あ、ん、んん! また、くる、ああつ! イ……。きそ……。う

「ああ、や、ああ、あああつ……。っ? ……あ……。?」

「ほひひ、まだまだよ、まだまだからね」

このカラダは
なかなか飽きが
こないの〜

ええ
買い物したの〜

あッ!!
ビクッ

はッ!

びく

「あ……？」

意識が戻ってくる。

「あ……う……」

徐々に視界がはつきりして、感覚も戻ってきて――。

私はまだ自分が犯されていることを悟る。

「ほひひ、お目覚めかえ？」

「いや……」

ずん、ずん、とコルネオのペニスが私の中で動いていた。

「おほ……おめぎで締め付けがキツク……またイキそう、じゃ・

「ん、あ、やああああ……」

どく、どぶ、どぶ――。

膣の奥でコルネオの白濁がぐるぐるとまわっている。

「ん――」

私はそれを退廃的な気分で受け止めていた。

もう何度膣内に出されたかわからない。

コルネオはあれから一週間、ほぼずっと私を犯し続けていた。

膣内からペニスが抜かれたことはほとんどない。

本当に、ずっと、挿れっぱなしで――。

「このカラダはなかなか飽きがこないの〜。

ええ買い物したの〜」

涙の跡が乾いたせいか目の端が痛んだ。

「ほひ……今出したのに、また勃ってきたぞい？」

「……………」

(もう、ダメ……私、壊れ……る)

コルネオの腰が律動を再会し、

また腰の奥がずん、ずん、とリズムよく突かれ始めた。

「あ……や……い」

もう私の発する言葉は意味をなしていない。

犯され続けるだけの肉人形……。

END



「あなたに聞きたいことがあるの！
部下をつかってセブンスヘブンのまわりをかきまわっていたでしょう！
アレは何が目的だったの!?!」

「ほひ〜！
しゃべったら殺される!」

「言いなさい！ 言わないと……!」

「ほひ……ねえちゃん……本気だな。……えらいえらい」
「……俺もふざけてる場合じゃねえな」

「神羅はアバランチとかいうちっこいウラ組織をつぶすつもりだ。
アジトもろともな」

「……!」

そ…そんな! 神羅はそんなメチャクチャなことを
やろうとしているの!
やっぱり私の悪い予感間違いじゃなかった!
早く! 早く帰ってみんなに知らせないと!

「ちよつと待った!」

「……!?!」

「すぐ終わるから聞いてくれ」

「俺たちみたいな悪党が、こうやってべらべらとホントのことを
しゃべるのはどんなときだと思う?」

「答えは2! 勝利を確信しているとき!」

その声と共に、カチツと機械音が聞こえた。
落とし穴だ。



さあ
楽しいお仕置きタイムの
始まりだよ

!!

こういう風に
女が縛られてるって言うだけで
けっこう興奮するぜ？

「……ん……んは!?!」

目が覚めると私はいつの間にか拘束されていた。

「目が覚めたかい?」

「……ッ」

ニヤニヤと笑っている男を睨みつけるが、平然と受け流されてしまう。

「ここは屋敷の地下にあるお仕置き部屋さ。」

「コルネオ様に逆らった奴をじっくり教育しなおす部屋だよ」

「何よ、バカみたいなこと言っ——」

言いながら、私は素早く周囲を見回した。

とりあえず室内にはコルネオの部下が二人だけ、他の気配は見当たらない。

「く……」

そして私の手足を縛っているこの拘束具だけ……

これが案外やわなものだった。

少し力を入れるときしぎしと揺れ、外れそうになっているのがわかる。

(もう少し様子をうかがって、

体力が回復すればこの拘束具ならきつと抜けられる!)

「へへ……でけえ乳だな」

「それよりも俺は、こういう風に女が縛られてるって言うだけで

けっこう興奮するぜ?」

男達は勝手なことをつぶやきながら私の身体に手を伸ばす。

胸とおなかに無骨で汗ばんだ手が這い、怖気がした。

(く……悔しいけど、まだ気がついたばかりで体力が万全じゃない……。

このままもう少し耐えて、力をためないと……!)



「さてそれじゃあ“お仕置き”の時間だな」
「へへ……」

私の服に手をかけて、一枚一枚剥ぎ取っていく。
(こいつの手つきと目……本当に、気持ち悪い……!)

「味のほうはどうか……?」

異様に長い舌が伸び、私の胸の先端に到達した。
「ん……」

「甘い良い匂いがするぜ? けっこうお前の好みかもしれないねえな」
「ほう? 試してみるか」

冷静だったほうの男も私の乳首にむしゃぶりついた。
「ん……、は、あ……」

大の男二人が赤ちゃんみたいにおっぱいに吸い付いてきてる。
扇情的な光景に思わずめまいがした。

けれど、これはチャンスだ。
冷静なほうの男がこのまま私の胸に夢中でいてくれれば、
抜け出すチャンスはいくらでも生まれる。

(た、耐えるのよ……7番街をつぶすなんていう
危険な計画を見過ごすわけにはいかない……)

なんとしても、みんなに伝えないと!

男二人の舌と指が蠢くのを見ながら、私はため息をついた。
筋肉のこわばりがなくなり、

ある程度は体力が回復してきたのかがわかる。
もう少し……もう少しで……

●もう少しガマンする↓
36

●拘束具を破壊する↓
40



チャンスがうかがっていると——
ヴヴヴヴヴヴ……

という耳障りな音が聞こえてきた。

「んんうっ!?!」

男がいつの間にか電気マッサージ器具を取り出して、
私の股間に当てていた。

「おっと、良い反応するじゃねえか」

「くう……ふう……ッ」

機械の荒い振動なんかで反応してしまう自分が情けない。
マッサージ器の刺激はとても大雑把なものだし、
それを操る男の手つきもおざなりなもの。
けれどその圧倒的な振動は
広い範囲をカバーするものだった。



ヴヴヴヴヴィーン……。

「うう……はう、くっ……うう」
情けない。

気持ちなんて全く入っていない刺激なのに、私の身体は感じ始めてしまっている。

「こんな弱い振動じゃ物足りねえみたいだな？
おらよ、パワーMAXだ！」

「ヴィイイイイイイイイイイイイーン！
ティファアー!? んんあああああああつ！」

振動が急激に強いものになり、
ほとんど暴力的なものへと変わる。

「はは、急にシミが大きくなりやがった！」
「い、いや、あ、やめ……こんな、こんなのでえ……!!」

強制的に快感が押し上げられてしまう。
ヴィイイイイイイイイイイイイーン!!!

男はサデイスティックな視線で私を見下ろし、
そして目を覗き込んできた。

（うう……こんな奴にこんな姿を見られるなんて……!!
でも、止まらな——）

「はあ、ああ、い、い、あ、ああ、あああああつ！」
頭の中が一瞬白く染まる——。



どうだ？
悔しいだろ？

あんな
機械に
イカされて

今度は
オレたちの手で
イカせてやるよ

「あは……はあ、は……ああ……？」
意識が戻ってきたときにはもう、
新たな刺激が与えられ始めていた。
二人の男がそれぞれ私の身体にむしゃぶりついている。
「や、やめなさい……！」
「二度氣をやつといて、今更貞淑なフリか？」
「く……」
もう拘束を解くどころじゃなくなってしまつてる。
力を入れようにも、男達から与えられる刺激が……
快感が許してくれない。
「は、なせ……ん、はあ、離しなさい……いよっ……！！
くあ、あああん！」
「威勢が良いのは口だけだな」
股間に口をつけていた男が顔を上げていう。
もう機械の強い刺激はない。
けれど、人間から与えられる
巧みな愛撫の快感は大きかった。
「うく……っはあ、ああ——」
唇を噛んで我慢していても
徐々に確実に快感がふくれあがってしまう。
（力が入るようになれば……集中して……！）
でもすぐに集中は乱れ、熱い吐息が出てしまう。
そしてその吐息と共に力も抜けていく。
もうどうすることもできなくなっていた。



あああ
あああ
!!!

「お仕置き本番といくか」
ふいに片足の拘束が外れた。

「え……えっ？」

カチャカチャと耳障りな金属音が聞こえ、
男がズボンを脱いだことがわかる。

「やめ、ま、待って！ それだけは……ああ、ああああん！」
男は無言を言わず、私の中に侵入してくる。

「は、ああ、んんっ、やあああ……」

私のアソコはすんなりと男のモノを
受け入れられるくらい濡れていた。

ずぼぼ、ずぼ、じゅぼ——！

そして男が腰を動かすたびに新たな愛液が。

(どうして……私の身体、こんなに……っ)

あふれたそれが、お尻を伝って

太股のあたりまで濡らしているのがわかる。

(どうしてこんなに感じてるの……!?)

片足の拘束は外れているのに、

もう男達にされるがままになっていた。

下腹の奥をついてくるペニスの感覚に翻弄される。

「くう……、はあ、ああ……やっ、んんっ、ああ、いう……!」

突かれるたびに小さな電光が頭の中に生まれ、

皮膚にはちりちりとした快感がむずがゆく走る。

「まだか？ もうそろそろ変われよ」

「く……あと少しだ……!」

私のなかで、男のモノがまた少し大きくなった気がした。

ぐちゅ、じゅぶ、ずじゅ、ずぼ——！

愛液にまみれたアソコもより卑猥な音を立てる。

「ん、ああ、や、やだ、ださない……で……、いやあああ！」

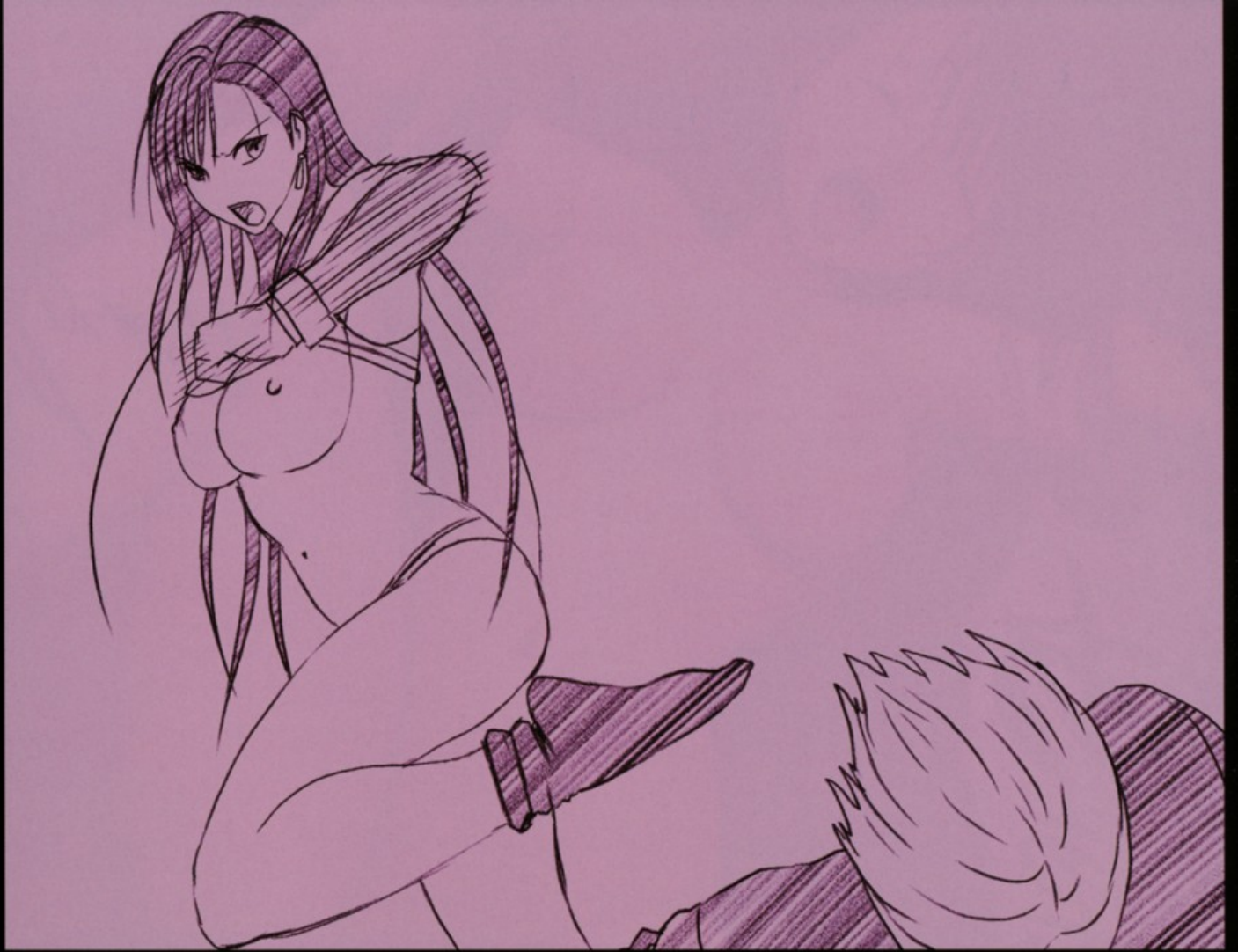
「く……うおおおっ!」

「ひ——や、いやあああああああああ！」

びくびくと腰が跳ねる。

白濁を注がれながら私の意識は闇に落ちていった……。

END



(今がチャンス——！)

思い切り四肢に力をこめて拘束を引きちぎり、

「ハッ！ ヤアッ！」

ゴッ！

ガキッ——！

そのままの勢いで男達に正拳と回し蹴りをお見舞いする。

油断しきっていた男達はそのままあっさりと崩れ落ちた。

「ふう……後はここからなんとかして抜け出し……て……え？」

上半身が揺れたかと思うと、床に膝をついてしまっていた。

「くっ……」

(す、既に薬を打たれていた……？)

急に動いたから血が回って、多分薬も一緒に……)

ハアハアと息をするたびに

頭がガンガンと鳴り、身体は痺れてくる。

「——おい、なんだ今の物音は」

複数の足音と、いぶかる男の声が聞こえた。

(まずい、もう気付かれて——！)



「姉ちゃん、オイタは感心しねえなあ……」

「は、離して！」

「やれやれ、葉が効いてるっていうのに

ここまで強情だとはな……」。

“お仕置き”は俺の専門外だ、

コルネオ様にじきじきに見てもらおうからな」

新たに現れたコルネオの部下は、動けない私をまた拘束する。

「オラ、葉が効いても這って歩くくらいならできるだろ？
行くぞ」

「うう……」

男に追い立てられ、私は文字通り這うように

コルネオの部屋へと進んでいくしかなかった……」。

ほどなくしてコルネオの部屋の悪趣味な扉の前につく。

「ほひひ、今度こそ俺の手でメモメモにしてあげるよ」

「くっ……！ 誰があなたなんかに！」

ほひひ
イきそうなら
素直になつてごらんよ〜

…!!

ん
ッ!

ビクッ

さつきからコルネオは執拗に私の胸を愛撫していた。先端をつまんだり引っ張ったりしつつ、全体をゆっくりと揉みしだっている。

(フン、下手くそね……)

こ、このくらの刺激なら、なんとか耐え……)

そう思った瞬間に、皮膚がつっぱるような感触が沸き起こった

(え、何……?)

コルネオの指の動きは変化していかないのに、

皮膚が張り詰めているかのようにどんどん敏感になっていく。

(ちよ、あ……れ……くう!)

「ほひひ〜!」

後ろにいるコルネオの吐息が

首筋にかかっただけでもぞくぞくと鳥肌が立ってしまった。

「ん……や、あ、あッ!」

乳首をこねられただけで、

さつきまでとは全然違う大きな快感が訪れる。

(な、何を……したの、いったい、んんっ!)

「ほひ? 俺はナニもしてないよ、

ただ単にさつきの薬が効いてきただけじゃないかな〜」

(さつきの薬、つて……)

筋弛緩だけじゃなくて、媚薬の効果も……!?)

もう身体の奥にカッと火が灯ったようになっていて、

感覚のざわめきが全然取まってくれない。

単調なコルネオの愛撫なのに、

私の腰は自然と揺れ息も乱れ始めていた。

(はあ、だ……めえ、こんな、胸だけ、なの……にい……)

「ほひひ、イきそうなら素直になつてごらんよ〜」

「んっ!んんん!」

ムダムダ♪

んっ…

ほんとに
素直じゃないな

そんなところも
イイんだけどね

早くここから脱出して…
みんなにこの危機を
伝えないといけないのに！

んっ…

ココをこうやって
イジれば
おとなしくなるかな？

んんっ！！

こんなところで
こんな男の相手を
してる場合じゃないのに！

(まずい……このままじゃこいつの思うつぼ……)

「く……！」

コルネオの腕から逃れようと、私は必死に身をよじる。
薬のせいで大して力が出なかったけれど、
それでもコルネオに抵抗の意思を見せるくらいならできる。

「ほひ？」

(こうして抵抗して、思い通りにならないところを見せれば、
こいつのほうも萎えてくるかも……)

野太い腕を振り切るようにすると、胸からは離れていった。

「ん……く……！」

けれど、一旦離れた指はすぐ戻ってくる。

しかも今度は股間のほうへと移り、
やわやわとした刺激を与えてきた。

(うう……この、いい加減に！)

また身体をよじって抜け出そうとする。

でもさすがに今度はがっしりと
身体を押しえ込まれてしまっていた。

「うう、はあ、あく……う……」

「ほんとに素直じゃないな。そんなところもイイんだけどね」
眩きながらコルネオは愛撫を再開する。

(あ……指が、当たってる……)

コルネオの指は的確に私のクリトリスを捉えていた。

私が暴れたせいで気分を害したのだろうか。

胸を愛撫していたときは違って、
容赦なく強い快感を与えてくる。

「あふ……ふう、ああ、やあん……！」

もともと私はクリトリスでそこまで感じるほうではないと思う
他の人の話を聞く限りでは、胸や膣のほうが多分敏感だった。

(だけど、この感覚……！)

コルネオの指がクリトリスを往復する度に
下腹部の奥に電流が走る。

(やだ……子宮が、疼いてる……)

下から上に擦りあげていくときに、

何ともいえない背徳的な快感が背筋を走っていった。

「ほひ……ゆっくり、ゆっくり、

このままいっっぱいしてあげるからね、ほひひ」



暴ればば
暴れるほど
気持ちよく
なっちゃうよ〜

くっ!!
何もできない!!

でも抵抗を
やめるわけには……!

「はあ、ああ、あふ……ん……」
でも私はまだ一回もイッていない。
私がかマンしているわけではない。明らかに弄ばれていた。
私が高らかな快感の波に揺られそうになると
敏感にそれを察知して指の動きを止める。
テクニク自体は単調なものだけど、
女の快感の状態を把握するのはとても長けているみたいだった。
「ぬるぬるプレイはどうかの〜?」
そして今、私はコルネオの言葉通り、ローションにまみれていて
粘液のなかに溺れるようにしながら、
背中にコルネオの高い体温を感じていた。
ぬるぬると身体は揺れ動き、
自分とコルネオの境界線が曖昧になっていく。
「あああ……はあ、ふうん……は……」
もうほとんど抵抗の気力は残っていないかった。
ともすれば取り込まれそうになる“心”を
なんとか自分のなかに保つただけで精一杯。
精神はさつきからずっと快感に揺れっぱなしだった。
（ゆらゆら……ゆらゆら……頭が、からだか——）
「ん……」
身をよじってみてもやはりほとんど意味はない。
もはや私は、自分が抵抗のために身をよじったのか、
それともローションの感触を楽しむために身をよじったのか、
わからなくなっている。
「ほひ〜!」
少なくとも、私が身動きしたことで
コルネオを楽しませことは確かだった。



「そろそろいいかの〜?」

「あ、は——?」

快感にたゆたっていた頭と身体に、急に強い芯が打ち込まれたかのようになった。

「あ、あ、あ、あ——」

コルネオの指の動きが変化する。

ずぶ、ぐにゅ、ずぬぬぬ——!

その太い指が、一本、いや、二本。

私の腔内に侵入してきた。

「あ、ああああああああ——!!!!」

途端に脳内で白い光が爆発した。

今までたゆたいたいながら押し留められていた快感が一気にあふれ出した。

「そ——こ、は——、はあ、ああああああ——!」

しかしすんでのところまでコルネオの指の動きは止まる。

「んぐっ! あぐ、ひああ、ああ……あ……う……?」

高められていた身体はつんのめったように止まった。

「どうし……て?」

コルネオの指はまだ私のなかにあった。

それなのに全く動いてくれないのだ。

(どうして、どうして……!)

思い切りおなかに力を入れて、コルネオの指を食い締める。

そうまでしてもコルネオの指は動かない。

「ほひひ」

「……?」

「さあ、どうして欲しいのかな〜?」

「——!」

コルネオの言葉にはつと我に返り、

やっと自分のしていたことを自覚した。

だけどその自覚はもう私を冷静にはさせてくれなかった。

羞恥に新たな炎が芽生え、

性感のもどかしさが高まるばかり——。



んんん
いつまで
耐えられるか
見ものだの〜

んッ...

!!

どれだけ
焦らせば
気が済むの……!

ギシ

ギシ

気がつくくと、今度はベッドにしつかりと拘束されていた。

どうしても私を“素直にさせる”つもりなのだろう。

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

迷う。

迷っている間にもどんどん時は過ぎ、切なさともどかしさが高まってしまふ。

（私は、わたしは……）

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」

「あう……くう、ふぐ……はあ……」



「うう、何よ……何見てるのよっ……!!」

「ゴルネオそんなは私にじつとりとした視線を送って見下ろしている。」

「ほひひ? 別にいい」

「(負けないんだからっ!)」

「きつと睨むと、またゴルネオの指が動き始める。」

「いう……!! うう、はあ、ああ……、やああああああ!」

「今度はさつきよりも強く、大きな動きで。」

「執拗にGスポットを刺激してくる。」

「私の心には大きな戸惑いが生まれていた。」

「このままゴルネオの言う通り、“素直”になっちゃえば——」

「そんな気持ちが大きくなっている。」

「迷う。」

「迷っている間にもどんどん時は過ぎ、切なさともどかしさが高まってしまふ。」

「ん……、んあ……、はあっ!」

「そんな私の気持ちを見透かしているのか、」

「ゴルネオは最後の一押しとばかりに刺激を再開した。」

「またGスポット。疼く。」

「隆壁をひつかいてほしくて。強い力で、大きなもので——。」

「(私は、わたしは……?)」

「(イキ……たい……)」

「ずっと我慢しっぱなしだったんだから。」

「(イキたい、イキたい!)」

「我慢したぶんだけ、大きな快感を——。」

「(欲しいの……!)」

「私はゴルネオの“あの言葉”を待った。」

「次にあの言葉をかけられたとき、私は——。」

「ほひ。さあ、そろそろ素直になつてくれたかな」

「(きた……、きた!)」

「ゴルネオの言葉を耳朶に感じるだけで、期待が胸いっぱい広がった。」

「どうして欲しいのかな」

「……イ、イかせて……ください」

「ほひっ!! ちゃんと喋ってくれないとわからないな」

「こ、ゴルネオ様のぺ、ペニスで……私を、イかせてください!」

「ほひひ、もっと下品に言っ欲しいところだけど……」

「これくらいで満足しとくかな。でもそのかわり……」

「ゴルネオは私の顔の前に腰をつきます。」

「たくましい肉棒が視界いっぱいに入ってきて、私は釘付けになる。」

「しゃぶってくれるよね?」



んッ!

「ほひおう!!」

コルネオが言い終わる前に、

私はその剛直にむしゃぶりついていた。

早く、早く――。

そんな焦りが胸いっぱい広がる。

身体の疼きと飢えをそのまま

ぶつけるかのようにしてペニスをほおばる。

「ん、んじゅ、じゅぷ、じゅほほ……!!」

「ほひっ! うまい、うまいぞっ!」

そうそう、もっと強く吸って……」

喜色満面になりながら、コルネオが腰を打ち付けてきた。

「んぶ……っ! はあむ、あむ……ふう!」

(く、くるし……!)

精一杯に口を押し広げて、私はコルネオの動きに応える。

苦しい、確かに苦しいけれど……

これからきつと、このペニスが、私を。

(犯して、くれる……)

そう思うと奉仕にも熱が入った。

「はむ、ちゅぷ、ぷほっ、じゅぷ……じゅずるるるっ!」

下からコルネオの表情を確かめながら、

快感のポイントを探った。

傘のようになっていたところに舌を這わせるのが

特に気持ち良さそうだった。

「れる……んちゅ、じゅるる、れる……」

「た、たまらんっ! い、今のはちよつと危なかった……。

ほひ、今度は胸でしてもらうかのっ」

こんな風に
身体をもてあそばされてる
のに……

でも
もう私は
抵抗できないんだ……



「ん……」

こんな風に自分の胸が使われるだなんて。さつき高まりかけていた気持ち急速に冷めていくのを感じた。

「はあ、はあ……」

「コルネオはゆるゆると腰を動かして、私の胸の間を行き来している。もうちょっと強く挟んでくれるかの？」

「……………、はい……」

言葉通り、強く挟むとよりペニスの形をはっきりと感じる。

フェラチオの時は、少しおかしいほど気分が乗ってしまった。だけど今はだいたい落ち着いてきている。

そのぶん、自分のしていることの恥ずかしさを意識してしまうのだけれど。

男のために自分の胸を差し出すのはとても屈辱的だった。お腹の上に乗られて、胸の間を好きに動かされる——。

（こんな風に身体をもてあそばされてるのに……）

でも、もう私は抵抗できないんだ……）

そう、頭の中はかなり冷静になっているのに。

今の私はもう抵抗することは考えていない。

ただコルネオの言うがままに素直に伝えて、そして——。

（やっぱり、欲しい……！ この男のコレを、早く……！）

少しでもコルネオが快感を感じられるよう、

私はいつしか積極的に胸を動かしていた。

コルネオが腰を押し込めるときには柔らかく受け入れ、

引くときにはカサの部分にひっかけるように強く挟む。

乳首もあてるようにすると、瞳が扇情的な色に光った。

「ほひひ……こんな良い眺めも捨てがたいけど、

そろそろご褒美をあげないと……」

「あ……ああ……」

「欲しいかえ？」

「——は、はい……。欲しい、欲しい……です」

んんん!!

ククク

こんな具合の良いマ●コ
一回出したくらいで
萎えるわけがないよ

くく

「答えた途端に、コルネオは乱暴に私の身体を組み伏せた。」

「さざうまいだろうな」

「あ、はあ……」

「ほいじゃ、いくぞお！」

熱い肉棒が私の秘所にあてがわれた。

(やつと……やつと……！)

そして期待通りに、私の膣内に――

ずぶぶぶぶぶぶぶ！

「あ……か――」

息ができない。

「ほひひ！ 良いぞ、良いぞ……！」

腰が浮くどころではない。

がくがくと全身が震える。

そうやって身体をいっぱいに使わないと、

この快感を受け止めることができない。

(入れられただけで、こんな……！)

私のおまんこは、待ちかねていた快感をどん欲に受け入れていた。

ペニスが根元まですぶりと突き刺さっても、

まだ先を求めるかのようにぎゅうつと食い締める。

自然と涙が流れ出す。

私の身体はそれくらい歓喜に打ち震えているんだ。

「ほひ？ 入れただけでイッたのかな？」

「だ……め、動かない……でえ！」

「私、バカにな……る、こわれ……るうううううううううう！！」

「こんな具合が良いマンコなのに……」

動かないなんて、拷問だよっ！

「あ、あああ、ああ――！！」

ほひひ！
このまま抜かず三発……
いや五発くらいは
イクかの？

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「ほひひ……まだ終わりじゃないからね」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

「ほひひ、格闘娘の締めりはさすがに違う〜！」

「あ、へ、え……？」

「え……は、あ……？」

この本は同人ソフト「抵抗するティファ」のCGを収録したものです。

ティファとコルネオといえは古典的な組み合わせですが
これまで意外にあまりスポットをあてたことがなかったので
やってみました。

あと、やはり処女の状態で犯されるシーンが一番盛り上がると思うのですが
普通のストーリーだとそれが1回しか描けないところが、
今回のような分岐アリのストーリーだと処女状態での挿入を何回も描けたので
結構良かったです。

今回はCGにもセリフなどをふんだんにかぶせてみましたが
これはこれでアリですね。

2009年 5月1日発行

抵抗するティファ

発行 / クリムゾン

<http://www.alles.or.jp/~uir>

印刷 / 大陽出版株式会社

「抵抗するか？あきらめるか？」

一人コルネオの館に向かうティファのカラダにいくつもの陵辱が降りかかる



情報屋との交渉で体を要求され...



コルネオの館での面接でボディチェックをされ...



スパイであることがばれてお仕置き部屋での性的拷問を受け...



コルネオの部屋で二人きりになり...

